

世界陸上 OREGON2022 における COVID-19 対策

鎌田 浩史¹⁾ 田原 圭太郎¹⁾ 山澤 文裕¹⁾

1) 日本陸連医事委員会

【はじめに】

COVID-19（以後：コロナ感染）は日本では2020年1月に初発例が確認されて以来、2023年の今でも猛威をふるい3年近くにわたり我々の生活に甚大な影響を及ぼし続けている。TOKYO2020をはじめ、数々の国際大会が延期または中止、制限付きでの開催となった中、2022年7月にアメリカオレゴンで世界陸上2022が「World Meet」というスローガンのもと開催されるに至った（図1）。満を持して臨んだ大きな大会ではあったが、一部報道されたように、日本選手団においてはコロナ感染が拡大し、競技や個人の健康状態に大きな影響を与えた。これまでに経験のない緊迫した状況であったため、コロナ感染対策について報告する。

【コロナ感染の状況】

大学構内のドミトリーが選手村として用いられた。入村6日目、大会初日の2022年7月15日、コーチ、役員（スタッフ）2名が強い咽頭痛を訴え熱発した。PCR検査を施行したところ、陽性と判明した。同室者についてもPCR検査を実施したが、この時点では同室者は陰性であった。大会側の規定により、感染が確認された後、大学構内の別棟に設置された感染棟（図2）に移動し、個室にて5日間または発熱が落ち着くまで待機することとなった。食事は大会側から弁当のような形で提供されていた。この間、感染者は日本選手団とは全く接触せず、大会側の医師と連携しながら細心の注意をもって感染者の健康状態を確認することとした。

その翌日には選手とスタッフ併せて4名が咽頭痛、熱発などの症状を訴え、PCR検査を行ったところ陽性が確認された。自覚症状は強いものではなかったが、同室者の1名が陽性となった。

感染は連日拡大し、大会終了までに選手団全体で



図1：本大会のスローガン

は、選手6名を含む合計20名に感染が確認された。この中には、帰国直前検査の際に判明した者、体調は大きな変化なかったものの有症状の感染者の同室者への検査で陽性になった者も含まれていた。選手団の感染者の中には、咳や強い咽頭痛により間欠的に呼吸の苦しさを訴えた者もいたため、念のため救急病院を受診させ検査等を実施した。他に、数日間高熱が続き食事も喉を通らないような強い症状を出していた者もいたが、幸いに重症には至らず、いずれも安静、加療において症状は改善した。

アメリカのCDCガイドラインに基づいた今大会のメディカルプロトコールにより、PCR検査陽性の者は基本的には確認後5日間の別棟での隔離管理が行

われていた。当初は5日経過時点で検査を行い、検査陰性確認のもとで隔離解除との指示が出ていたが、その後、検査陽性の判断から、72時間強い症状（熱発、咳、たん）がなければドクターの判断で5日をもって隔離期間を終了するという方針変更となった。しかし、隔離解除となった後でも、日本選手団としては、できる限り、選手やスタッフとの接触を避けるような体制で過ごすこととした。

なお、帰国に当たっては日本国の水際対策に従い航空機搭乗72時間以内のPCR検査で陰性を証明する必要があったため、帰国前にPCR検査を全員に対して実施した。

【感染検査室】

感染検査室はもともと日本選手団スタッフが居室として提供された棟の近く、サブトラックへの動線上に設置されていた（図3）。選手の滞在した棟からはかなり離れており、徒歩5分程度はかかるため体調の悪い選手が感染検査室を訪れるのにはかなり苦痛であったと思われる。感染検査室を訪れる各国選手は日に日に増えていたと思われるが、細かい感染者の報告はなかった。

さらに、大会後半になると、感染者ではなく帰国のために検査が必要な人々、感染後のフォローのための検査を訪れる人が混在していた。日本国の水際対策の関係で選手団だけでなく、大会に携わる多くの日本人が検査を訪れていた（図4）。さらに参加選手数の多い中国はゼロコロナ政策により団体で検査を訪れて、まさにカオス状態となっていた。

手続きが非常に煩雑であり、検査員も2名のみで対応しているため感染検査室に滞在する時間も長くなり、規模の大きい世界大会のコロナ検査機関としては不十分な印象を拭えず、対応に関してはもう少し吟味して洗練して欲しいというのが率直な感想であった。

【実施した対策】

- ・大会開始前に実施したこと
 - ①結団式選手ミーティング（WEBミーティング）において、マスクは食事と練習（選手のみ）以外は着用、手指消毒の徹底、濃厚接触者にならない・させない工夫、気になる症状などについて説明した
 - ②選手団全員が新型コロナワクチンを2回以上接種済みであることを確認した



図2：感染者用隔離棟 案内する担当者はマスクをしていない



図3：COVID-19 検査センター



図4：大会後半になるにつれ長蛇の列

- ③日本出発時、出国前の抗原定性検査を実施した（図5）

この時点で一人の選手が無症状ながら検査陽性となったため、出国を中止し、大会出場も見合

Certificate for SARS-CoV-2

Name (Last, First)	[REDACTED]
Gender	[REDACTED]
Date of Birth (dd/mm/yyyy)	[REDACTED]
Passport No.	[REDACTED]
Nationality	JAPAN

1) ① Result Date (dd/mm/yyyy)	① (10/07/2022)
② Sampling Date and Time (dd/mm/yyyy/ :)	② (10/07/2022/10:21)
2) Result of Qualitative Antigen Test Detection for SARS-CoV-2: (Nasopharyngeal Swab)	Negative (Not Detected)

Date of Issue (dd/mm/yyyy) : 10/07/2022

Signature of Physician : [REDACTED]

Name of Physician(Printed) : [REDACTED]
(Implementation location)
Nippon Medical School Narita International Airport Clinic
1-1 Furugome, Furugome Aza, Narita-City, Chiba, Japan 282-0001
TEL#:+81-476-34-6119
FAX#:+81-476-34-6121




図 5 : 成田出発時抗原検査結果

わすこととなった。また、その時点で、検査結果が確認されるまでに比較的身近にいた者の日々の健康状態を細かく確認するとともに、周囲との接触、食事なども単独で行ってもらうこととした。幸いに、感染兆候は出現せず大会に臨むことが出来た。

- ④ N-95 マスクを配布し、特に移動中の密な環境の中では可能な限り使用することとした。先発隊出発までに大会期間中に使用する予定数を準備することが出来なかったこと、さらに感染拡大もあったことから、後発組が追加分を搬入した。

・現地において実施したこと

改めて、マスクの徹底、手指消毒、密の回避を指示した。

感染拡大が判明してからは、

- ① スタッフに関しては体温を計測して申告する様にした(選手には体温チェックを指示していた)
- ② N-95 マスクを大会側でも準備するよう依頼した
- ③ 大会側からの指示もあったが、日本選手団は別室(図6)にて食事をとることとなり、必要なタイミングのみ食事会場(図7)に行くこと、基本的には集団で食事をしない、黙食、孤食な



図 6 : 日本選手団は別室で食事となった



図 7 : 選手村のビュッフェ

どを徹底した

- ④ スタッフ等に多く発生していることを踏まえて、個室管理できる、他の選手団と異なる個別の棟へ移動した(図8、9)(しかしながら、トイレ、シャワーは共用)
なお、大会側には選手たちの個室移動を依頼したものの、トイレやシャワーが付属しているなど選手の環境が適切な個室確保は難しかった(図10、11)
- ⑤ 練習や大会においてはマスクを外すタイミングもあることから、選手団にはとにかく人が密になっているところには近づかないようにし、手指消毒、使用物品・道具の消毒を慎重に行うよう指示した
- ⑥ 感染拡大が広がった時点で、選手たちとWEBミーティングを実施した
改めて日本選手団に起こっている状況を説明し、日本選手団としてできる「感染しない」「感染を拡大させない」ということを一同で再確認



図 8 : 移動前のスタッフ宿舎 2 人部屋 比較的広い



図 10 : スタッフ用宿舎の共用バス、トイレ



図 9 : 移動後のスタッフ宿舎 1 人部屋だが非常に狭い



図 11 : 性別区別がない

した。

- ⑦日本でバックアップサポートする陸連医事委員と密に連携をとり、現状を報告し、適切な対応について協議を行いながら感染対策を実践した
- ⑧この大会後に開催された U20 世界選手権カリ 2022 大会に引き継げるよう、情報を収集し出国前からの対策を徹底してもらうこととした

【感染拡大の原因について】

今回の日本選手団に多く感染者が発生した点に関して、エビデンスはないものの、筆者の見解は以下の通りである。

①アメリカにおける状況

コロナ感染拡大は比較的落ち着いていると判断されているためか、一定のルールは残っているものの、市中においてマスクをつけていない人が多く見受けられた。(選手役員はあまり立ち入ることはないが) スタジアム内は密状態の中



図 12 : スタジアムでの観戦風景 マスク少ない

で、マスクの着用は義務付けられてはおらず、当時の日本の日常とはかけ離れた環境であった(図 12)。

②日本選手団以外の状況

選手村の中でも限られた国以外の選手団は、マスクを着用せず、食堂では集団で会話をしながら

ら食事をとっていた。また、練習会場まではバスで移動となるが、バスの中でもマスクを着用しない者も多く見受けられた。

大会側から個々の発生は認められるものの、日本選手団のような集団発生は認めていないと報告された。日本選手団は今大会のメディカルプロトコルに従って有症状者のPCR検査を実施したが、入村後の検査実施や競技会出場に関しては、各国、各選手の自主性に任されていたため、正確な感染者数や感染拡大の状況は不明である。様々な点でコロナ感染に対する、各国の考え方には大きな差があるものと思われた。

③ 宿舎

今回の宿舎は大学構内のドミトリーを使用し、多くの国、多くの選手が同じ建物を共有していた。入り口では感染拡大防止に関する対策はほとんど行われておらず、マスクをしない各国の選手団、密の状態での宿舎生活であった。選手用の宿舎はツイン、トリプルで部屋にはシャワー、トイレが設置されていたが、別棟のスタッフ用宿舎はアメリカの大学ドミトリー独特の、部屋ごとのシャワー、トイレがなく、ワンフロアに2か所の共有トイレ、バスが設定されている中での生活となった。(余談にはなるが、驚いたことに、ユニセックス概念によるのか、男女兼用のトイレ、シャワーの設定(図11)になっており、このトイレで男性と女性とが顔を合わせることもあった。直ちに大会側に修正を依頼し、フロアごとに男女別の設定となった。)選手よりもスタッフに多く拡大が広がったことは、この点も関連しているのではないかと思われた。

④ 集団免疫

当時の日本国内における新型コロナ既感染者はアメリカをはじめとする海外に比べ少なく、ワクチン接種はある程度進んでいるものの、集団免疫という観点からは他国より劣っている可能性があると思われた。

【事後調査】

大会終了後に参加選手に対して大会後アンケートを実施した。その中でのコロナ感染に関わる内容をまとめた。

- ・参加選手中64名より回答を得た。事前のワクチン接種は2回22人(34.4%)、3回41人(64.1%)、4回1人(1.6%)であった。

- ・大会前に感染していた既往のある選手は6名(9.3%)であった。
- ・大会前、大会中に感染した10人の選手の情報が確認されたが、主な症状としては発熱5名(50%)、咽頭痛(60%)、味覚症状や咳など(10%)であり、無症状は2名であった。
- ・コロナ感染予防策としてマスク着用91.1%、手指消毒83.9%と、多くの選手が注意事項を実践していたものの、選手間の距離の確保37.5%、黙食26.8%に関しては徹底が十分でなかった。
- ・選手からみたコロナ感染拡大の理由について、多くの意見があった。原文のまま代表的な内容を記載すると、「宿舎において共同スペースが多かった」「選手村の食事会場はバイキング式で、自分で取りたい分を取れるが、海外の選手は全くマスクをしておらず喋りながら食事をとっていた」「スタジアムや食堂など人混み」「密」「マスクはしているけど、消毒等は不十分だった」などである。
- ・選手からみたコロナ感染拡大対策への意見をできる限り原文のまま記載する。「症状の有無関係なく全員毎日検査ができるようにして欲しかった」「陽性者が出た時点で1人部屋にするなど早急に対応して欲しかった」「選手の精神的な面を考えて欲しかった」「会見はリモートで行って欲しかった」などの意見があった。

【反省・まとめ】

華々しい成果のあったTOKYO2020後の最初に開催された世界陸上で、選手、関係者の期待は大きかった。しかしながら、世界陸上 OREGON2022ではコロナ感染拡大で日本選手団に未曾有の大きな影響が出た。コロナ感染で出場できなかった選手の無念さを思うと、残念な気持ちでいっぱいである。それだけではなく、幸いに感染を免れた選手たちも連日感染に対する恐怖、緊張感を抱き強いストレスを抱えながら過ごしたことを考えると胸が詰まる。悪いのは新型コロナウイルスであり、人的なものではないのは重々承知しているが、大会側の対策には不十分な点があったのではないかとと思われる。

このような状況は今後起こることは少ないかとは思いますが、実際起こったことを振り返り、今後に繋いでいくことにより、出場できなかった選手の無念を晴らせれば幸いである。また、帯同するスタッフも同様にコロナ感染への不安を抱えながら職務についている。平常時ですら業務量も少なくない中で、コロナ感染者が出ると業務量も格段に増え、睡眠時間

の減少、体調不良などの悪循環に陥っていた。コロナ禍の経済的な影響でスタッフの人数も限られ、特に陸連事務局のスタッフはこれまでになく少ない人数で極限の状態で行っていたと思われる。

いまだにコロナ感染は完全に沈静化しているわけではなく、また将来的にもコロナ感染が消滅するわけではない。これからいくつも国際大会が開催され、それに向けて様々なコロナ対策、感染症対策が必要である。